

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点 12点)

「鹿おどし」が動いているのを見ると、その愛嬌の中に、¹ なんとなく人生のけだるさのようなものを感じることがある。かわいらしい竹のシーソーの一端に水受けがついていて、それに筧の水が少しずつたまる。静かに緊張が高まりながら、やがて水受けがいっぱいになると、シーソーはぐらりと傾いて水をこぼす。緊張が一気に解けて水受けが跳ね上がる時、竹が石をたたいて、こおんと、くぐもった優しい音を立てるのである。

見ていると、単純な、緩やかなリズムが、無限にいつまでも繰り返される。緊張が高まり、それが一気にほどけ、しかし何事も起こらない徒労がまた一から始められる。ただ、曇った音響が時を刻んで、庭の静寂と時間の長さをいやがうえにも引き立てるだけである。水の流れなのか、時の流れなのか、「鹿おどし」は我々に流れるものを感じさせる。それをせき止め、刻むことによつて、この仕掛けはかえつて流れてやまないものの存在を強調しているといえる。

私はこの「鹿おどし」を、ニューヨークの大きな銀行の待合室で見たことがある。日本の古い文化がいろいろと紹介される中で、あの素朴な竹の響きが西洋人の心を魅きつけたのかもしれない。だが、ニューヨークの銀行では人々はあまりに忙しすぎて、一つの音と次の音との長い間隔を聴くゆとりはなさそうであった。それよりも窓の外に噴き上げる² 華やかな噴水のほうが、ここでは水の芸術として明らかに人々の気持ちをくつろがせていた。

流れる水と、噴き上げる水。

そういえばヨーロッパでもアメリカでも、街の広場にはいたるところに³ みごとな噴水があつた。ちよつと名のある庭園に行けば、噴水はさまざまな趣向を凝らして風景の中心になっている。有名なローマ郊外のエステ家の別荘など、何百という噴水の群れが庭をぎっしりと埋め尽くしていた。樹木も草花もここでは添え物にすぎず、壮大な水の造型が轟きながら林立しているのに私は息をのんだ。それは揺れ動くバロック彫刻さながらであり、ほとばしるというよりは、音を立てて空間に静止しているように見えた。

X 的な水と、空間的な水。

そういうことをふと考えさせるほど、日本の伝統の中に噴水というものは少ない。せせらぎを作り、滝をかけ、池を掘って水を見ることはあれほど好んだ日本人が、噴水の美だけは近代に至るまで忘れていた。伝統は恐ろしいもので、現代の都会でも、日本の噴水はやはり西洋のもののほど美しくない。そのせいか東京でも大阪でも、街の広場はどこもなく間が抜けて、表情に乏しいのである。

西洋の空気は乾いていて、人々が噴き上げる水を求めたということもあるだろう。ローマ以来の水道の技術が、噴水を発達させるのに有利であったということも考えられる。だが、人工的な滝を作った日本人が、噴水を作らなかった理由は、⁴ そういう外面的な事情ばかりではなかったように思われる。日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象ではなかったであろう。

言うまでもなく、水にはそれ自体として定まった形はない。そうして、形がないということについて、恐らく日本人は西洋人と違った独特の好みを持っていたのである。「行雲流水」という仏教的な言葉があるが、そういう思想はむしろ思想以前の感性によって裏づけられていた。それは外界に対する受動的な態度というよりは、積極的に、形なきものを恐れない心の表れではなかっただろうか。

見えない水と、目に見える水。

もし、流れを感じることでだけが大切なのだとしたら、我々は水を実感するのにもはや水を見る必要さえないといえる。ただ断続する音の響きを聴いて、その間隙に流れるものを間接に心で味わえばよい。⁵ そう考えればあの「鹿おどし」は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだといえるかもしれない。

(山崎正和「水の東西」による)

問一 傍線部1「なんとなく人生のけだるさのようなものを感じる」とあるが、「けだるさ」に該当する内容が記されている箇所を、本文中より七十字以内で抜き出し、最初と最後の五字で答えよ。ただし、句読点も一字と数えることとする。

問二 傍線部2「華やかな噴水」とあるが、「華やか」と対照的な意味で用いられている言葉を、本文中より漢字二字で抜き出して答えよ。

問三 傍線部3「みごとな噴水」とあるが、本文中の「噴水」に関する記述を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 「ニューヨークの銀行」の話から、「鹿おどし」よりも普遍的な価値のあるものとして現代の人々に受け入れられていることがわかる。

イ 「風景の中心」という表現により、見る人に対して視覚的に訴えるものであることが強調されている。

ウ 「ローマ郊外のエステ家の別荘」と有名な例を出すことで、「噴水」に興味のない読者からも共感を得られている。

エ 「樹木も草花もここでは添え物にすぎず」と誇張された表現により、西洋の人々が樹木などの自然には関心を持たず、噴水ばかりを好んで鑑賞していることが伝わる。

オ 「バロック彫刻さながら」や「空間に静止しているように」と建築物を連想させる隠喩表現が用いられ、噴水の存在感のある美しさが印象づけられている。

問四 空欄 X に当てはまる語を、本文中より二字で抜き出して答えよ。



1

a

C

9.

(問題の都合上、出典は省略)

読点等を含む)で説明せよ。

30
字

問二 次の文中の傍線部のうち、傍線部2「の」と同じ意味・用法で用いられているものをすべて選び、解答欄の記号を○で囲め。

清涼殿せいりやうでんの（注1）丑寅うしとらの隅の、北の隔てなる御障子みづぼねは、荒海あらうみアの絵、生きたるものどもの恐ろしげなる、（注2）手長、足長などをぞ、描きたる。上の御局みつぼねの戸おしあけたれば、常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふ。（注3）高欄こうらんのもとに青き瓶イの、大きなるを据ゑて、桜のいみじうおもしろき、枝の五尺ばかりなるをいと多くさしたれば、高欄の外まで咲きこぼれたる昼つ方、大納言殿、桜の（注4）直衣なほしウの、少しなよらかなるに、濃き紫こもんの固紋さしめきの指貫、白き御衣おんぎども、上には濃き綾あやのいと鮮やかなるを出だしてまゐりたまへるに、（注5）上エオの、こなたにおはしませば、戸口オの前なる細き板敷に居たまひて、ものなど奏したまふ。

『枕草子』より

（注） 1 丑寅——東北の方角。

2 手長、足長——障子に描かれた妖怪。

3 高欄——宮殿・神社・橋などの欄干らんかん。手すり。

4 直衣——貴族の平服。

5 上——帝。

問三 古典の随筆作品について述べた次の文のうち、正しいものをすべて選び、解答欄の記号を○で囲め。

- ア 『方丈記』は、人生の無常をつづった、鴨長明の作品である。
- イ 兼好作の『徒然草』は、「をかし」の感性に基づいた作品である。
- ウ 古典の随筆で最も古い作品は、平安時代に成立した『方丈記』である。
- エ 「ありがたきもの」の文章は、『枕草子』の「類聚的章段」の一つである。
- オ 『枕草子』には、清少納言が仕えた中宮彰子とのやりとりも記されている。

問四 二重傍線部 a 「経る」・ b 「なく」・ c 「書け」について、それぞれの活用の種類と活用形をまとめた次の表を埋めよ。

記号	単語	活用の種類	活用形
a	経る	活用	形
b	なく	活用	形
c	書け	活用	形

四 次の漢文の問題に答えよ。(配点 7点)

問一 次の空欄□を返り点に従って読む時の順番を、算用数字で解答欄に記入せよ。

①

下

三

一

上

②

下

レ

中

二

一

上

問二 次の□内の数字の順に読めるように、解答欄に返り点を施せ。

7

5

4

1

3

2

6

問三 次の白文に、後の【読み】に従って返り点と送り仮名を施せ。

君子欲訥於言而敏於行。

【読み】 君子は言に訥にして行ひに敏なると欲す。

問四 次の漢文を書き下し文にせよ。

今 吾 事_ニ 先 生_ニ 久_シ 矣、 而_{ルニ} 福 不_レ 至_ラ。